

6. 1940（昭和15）年の患者一斉調査と「無らい県運動」

本妙寺事件の余韻もさめやらぬころ、九州日日新聞に二つの興味深い記事が掲載された。一つは、7月14日付の「警官に講習」という記事である。

熊本県衛生課では全国一斉の癩調査に直面して、厚生省から予算一千五百円が送金してきたので、近く調査に着手することになった、然し同課では熊本から癩を駆逐し一躍無癩県を現出すべく意気込んで居るが、癩調査に際して調査の衝に当たる県下の警察官が癩病に対する知識が乏しければ調査の徹底が期せられず癩の知識を普及徹底せしむるために県下一千の警察官に癩病の素人診断方法を授けるため来る八月一杯にわたって「癩の素人診断講習会」を開催することに決定し準備を進めて居る、尚ほ講師としては蜂須賀衛生課長、宮崎九州療養所長、舟越衛生課技師等であると

もう一つは、7月22日付の「癩の調査を前に／診断虎の巻／県下警察官に講習」という記事である。

国辱病「癩」の撲滅を期して全国一斉に「癩」の調査をなすことになったので、熊本県では来る九月一日から同二十日迄県下一千の全警察官を総動員して戸口調査に準じて県下全戸別に調査をなし県下に潜む「癩」を虱つぶしに調べあげ県下から「癩」を一掃し「無癩県」にすべく意気込んで居るが、県衛生課では「癩」の調査に直接あたる警察官に「癩」の智識即ち診断力がなければ「癩」の診断が出来ないとあつて来る八月一日から八月一杯に亘って一千の警察官に「癩の素人診断方法」の虎の巻を伝授するため左記の日程で「癩」の素人診断講習会を開くことにし準備を急いで居る、尚講師は蜂須賀衛生課長、宮崎九州療養所長、舟津、国崎技師、川地警部等で講師を三班に分ち、スピード的に開催し所期の目的をあぐべく張り切って居る

▲八月一日北、三角署▲二日南、隈府署▲三日川尻、宇土署▲四日浜町、松橋署▲五日山鹿、植木署▲六日高瀬、御船、木山署▲十二日小国署▲十三日宮地署▲十四日高森署▲十六日南関、荒尾、宮原署▲十七日八代署▲十八日佐敷署▲十九日水俣署▲

本妙寺事件が一段落する9月1日から20日まで、熊本県では、政府方針通りに一斉調査を実施することになったという記事である。県下1000人の全ての警察官を総動員して調査に当たるが、その際に素人でも見分けられる「癩」の診断法の「虎の巻」を伝授するための講習会を開催するという。「県下に潜む「癩」を虱つぶしに調べあげ県下から「癩」を一掃し「無癩県」にすべく」という表現からは、熊本県の意気込みが伝わってくる。

11月12日、貞明皇太后は、国公立・私立療養所の関係者を大宮御所に招き、下賜金を贈

った。九州療養所では、その下賜金を使って、療養所北端に「紀元 2600 年紀年公園」を設置した。11 月 13 日付の九州日日新聞の紙面に、宮崎松記と、福田令寿が、次のようなコメントを寄せている。

九州療養所長宮崎松記氏談話

皇太后陛下には予ねてから癩救済の事業に御仁慈を垂れさせ給わっている、以前は日本の癩の救済は宗教家とくに僅か篤志家によってなされていたが、昭和五年陛下の御仁慈を口して以来本事業は国家の事業としてもっとも重要視される様になった、近き将来は日本国民から癩はなくなるしまた是非ともなくさねばならぬ、これは偏に、陛下の御仁慈の賜物と申さねばならない東亜の共栄圏内には支那、印度等世界における癩の多い国があり我々は八紘一宇の精神を以て陛下の有難き御仁慈を体して之等の癩の患者にも救癩の手を差し伸べねばならぬ、之は日本の東亜における重大なる文化的使命の一つであり、これが陛下の大御心に副い奉る所以であると考えられる、民族の優秀性を世界に向って誇示せねばならぬわが同胞の中にいまなお癩がある事は大なる恥辱である、一日も早くこの汚名を拭いわが国民をして名実ともに優秀民族たらしむる事が新体制下における我々関係者の真の臣道実践の道であると信ずる

回春病院福田令寿氏談話

本日私はライト院長の代理として大宮御所に御召しの光栄にあずかり何時も変らぬ皇太后陛下の癩救援に関する有難き思召しを承わり今回またまた向う五ヶ年間を期し年に多額の御下賜金を戴く事と相成り御仁愛の程ただただ感激の外はございません回春病院はリデルさんの創業でリデルさんと申せば明治以来わが国の救癩事業の鼻祖であって今日の救癩事業の発展は源をリデルさんに発しています、斯かる因縁ある病院であって、重ねてこの恩典に浴しまして院長以下関係者一同協心尽力愈よ誠意を以て本県を無癩県となす事を以て恩典に答え奉らねばならぬとしみじみ感じました

このように、節目節目に下賜される貞明皇太后の仁慈が、「無らい県運動」にさらなる拍車をかけることにつながっている。

そして、12 月末に一斉調査の結果が判明したが、1940（昭和 15）年の時点で全国にまだ 6573 人の未収容患者が存在することが分かった。このうち熊本県は 629 人で、全国の未収容患者の 1 割近くを占めている。それだけでなく、1935（昭和 10）年の調査よりも未収容患者が増えているのも、熊本県ただ一つであった（『楓の陰』第 119 号）。

正式な統計は、1942（昭和 17）年 9 月 30 日に厚生省予防局から『昭和十五年十二月三十一日調査 癩患者に関する統計』として刊行されたが、おそらく、この調査結果ほど、熊本県関係者を驚愕せしめたものはないだろう。関係者にしてみれば、長年の懸案であった本妙寺集落を解体したばかりである。癩予防協会では、11 月 30 日に、本妙寺集落一掃に

協力し収容に当たった功で、十時英三郎、石松量蔵、潮谷総一郎、江藤安純、エカード、野中みさ（慈愛園婦）、それに宮崎松記の7名に対して感謝状を贈ったほどである。

癩予防協会が発行した『最近予防事業の二、三に就て』では、「本妙寺部落の今回の掃討はマヂノ線の突破にも比すべく、この結果日本の癩界に於ても新しい秩序が建設せられて、無癩日本実現の朗鐘を聞く時も近づいた様な気がする」と評していた（『集成』戦前編第7巻）。長年の懸案であった本妙寺問題が解決して、誰もが、ホッとしていたことだろう。

ところが、本妙寺にばかり目がいつている間に、熊本県の未収容患者はむしろ増加し、全国の1割強を占めているという事実が判明したのである。そうでなくても、明治以来「癩病県」という汚名を着せられ、その象徴ともいべき本妙寺の集落を、やっとの思いで解体させたのに、それでもまだこれだけの未収容患者が残っていたとは……。

そのような驚きをもって調査結果を受けとめた熊本県関係者は、今度こそ熊本県からハンセン病患者を一掃するために、これまで以上に熱心に「無らい県運動」に取り組みねばならない、と決意したことであろう。しかし、結論から先に述べれば、太平洋戦争が勃発したことと、九州療養所の入所者定員という物理的制約のために、課題は全て戦後に持ち越されることになったのである。

1941（昭和16）年2月1日付の九州日日新聞に、「癩患者の街頭流出 県当局の取締」という記事が掲載されている。

熊本県衛生課では県下一千の警察官に癩の口（素カ）人発見の「虎の巻」を伝授し、さきに県下一斉に「癩患者出て来い」と街に彷徨う癩患者調査を行った結果驚く勿れ癩患者六百二十九名が街に溢れて居るのを発見した之等癩患者の取締に就ては県当局でも頭を悩まし宮崎九州療養所長と打合せをなし重症患者は療養所に収容する方針で善後策を講じている

この記事で指摘されている「六百二十九名」のハンセン病患者とは、1940（昭和15）年の一斉調査で判明した未収容患者のことであろう。けれども、その未収容患者全てが街をさまよっているわけではなく、むしろ家の奥深く籠もっている人がほとんどであろう。そのことを考えるならば、この記事は、県民に対してハンセン病患者への恐怖心をかきたてるだけであり、こういったマスコミ報道の姿勢は問われなければならない。

2月3日には、エダ・ライトが回春病院の解散を決定し、政府に寄付した。入所している患者58人は、全て九州療養所に収容された。

7月1日、九州療養所は正式に国立に移管し、菊池恵楓園が誕生した。7月12日に、厚生省予防局長の高野六郎らを招いて、国立移管式が挙行された。

7月15、16日の両日にわたって国立癩療養所所長会議が開催され、菊池恵楓園からは、所長の宮崎松記、事務官の下瀬初太郎、書記の北里重夫、熊本県からは警部の大橋唯喜が

出席した。会議では、「無癩運動の徹底に関する件」（患者収容施設一万床完成及公立癩療養所の国立移管による収容余力を考慮し関係道府県と協議の上患者の全部収容計画を樹立し無癩運動の徹底を期せられたし）などを協議している（『集成』戦前編第7巻）。

「無らい県運動」の徹底という観点から興味深いのは、10月1日の『楓の陰』第126号に掲載された内田守の「救癩事業をめぐる（三）」である。この中で、内田は「無癩常会」なるものを提唱している。

六七年前から「無癩県運動」と云うものが提唱されて山口、岡山、鳥取、愛知、愛媛、三重等の諸県では官民合同で、癩の啓蒙運動をやると共に、当時超満員で悩んでいた長島愛生園内に有志の寄付になる十坪住宅と云うものを建設して、県下の患者をどしどし入院させたのである。山口の如きは四五百名もいた患者が僅か十名足らずとなっている。……此の頃我々としては誠に耳よりの話を聞いている、それは新体制の常会組織によって、隣組の交友が親密となり、又米の切符制度によって陰の人を置く事が出来なくなった為に、今迄家に隠していた癩患者をかくし切れなくなって、常会の問題となり入院を希望して来る人が多くなった事である。……斯く隣組等が真に目覚めて患者の入院を斡旋する様になって始めて無癩国建設が可能となるのである。

戦時体制の下で、隣近所を中心に「常会」という制度が設けられたことをヒントに、内田は、ハンセン病患者の摘発のために「常会」が大いに効果があることを指摘し、それを「無癩常会」と呼んでいるのである。国民の相互監視制度の下で患者をあぶりだそうという内田の発想は、「無らい県運動」に全国民を動員しようとするものであり、戦後の「無らい県運動」の特徴を先取りしたものであったといえる。

1942（昭和17）年5月13日、厚生省は「国立癩療養所概況」を発表した。菊池恵楓園の部分は、以下の通りである（『集成』補巻8）。

一、恵楓神社について

御下賜金に依り建立中の園内神社は昨年十一月十日を以て落成鎮座式を挙行致しました。御神霊伊勢神宮より御受け申上げ光明皇后を併祀奉りました。社名は恵楓神社と呼称致します尚御下賜の楓樹二〇〇本は神苑に移植いたしました。

一、戦時下の報国精神に就いて

国立移管第一年にして職員患者共に心境を新に相協力して大東亜戦争下国策の向ふ線に沿い物資の節約食料蔬菜の自給増産に努力を傾ると共に収容施設の狭隘を克服して定員外収容一五〇名に達し猶現在熊本県の無癩県運動に協力して収容を継続して居ります。

一、熊本回春病院に就いて

昨年二月に解散致しました熊本回春病院は将来何等かの形式に於て癩予防事業に

使用され度き希望を以て土地建物並に基金七万円を癩予防協会に寄附せられました。その後同協会に於ては寄付者の意志に従い癩未感染並児童育英事業を兼ねたる保育所を跡地に設置すべく計画を樹立し既に所長及び主事の決定を見、又当園長に委嘱されたる関係工事も着々進捗中でありまして六月中旬には竣工の予定であります。

ここにも明らかなように、菊池恵楓園は、「現在熊本県の無癩県運動に協力して収容を継続して居ります」というように、熊本県が進める「無らい県運動」に協力していることを強調している。

6月25日には、癩予防協会の全国総会が熊本市公会堂で開催された。その席で、県衛生課の野田恒広と北署巡査の畠山泉が癩予防功労者として表彰されている（6月25日付熊本日日新聞）。また、無癩県として、福岡、岡山、広島、山口、宮城県が表彰された。午後は、宮崎松記と三井報恩会理事の山口憲の講演の後、映画「小島の春」が上映された（6月26日付熊本日日新聞）。野田と畠山の表彰の理由は、以下の通りである。

野田恒広：昭和七年四月県衛生課員拝命。爾来今日まで癩予防事業に従事し癩の撲滅に奔走。熊本市内から癩を一掃した功績がある。

畠山泉：昭和八年六月県巡査を拝命し職務に尽力し殊に昭和十五年三月から同十七年三月まで花園巡査派出所に勤務し、癩患者の城郭とまで称せられた本妙寺一带に居を構えた癩患者の掃蕩に多大の功績があり曩に予防の功労者として表彰されたが今回又復表彰されることになったものである。

なお、6月26日には、回春病院跡に竜田寮が開設され、10月2日に、菊池恵楓園では、患者の子弟の保育所として設置していた「恵楓園」を廃止し、児童29名他が竜田寮に移転した。この竜田寮は、1954（昭和29）年に、黒髪校事件で有名になる。

先ほども触れたように、9月30日に、厚生省予防局が『昭和十五年十二月三十一日調査癩患者に関する統計』を刊行した。ここでは、その調査結果に少し詳しく触れてみたい（『集成』戦前編第7巻）。

1940（昭和15）年時点の患者総数が1万5763名、未収容患者が6573名。未収容患者の数は、1935（昭和10）年の調査（9965名）に比べ3392名減少していることが明らかになる。未収容患者のワースト3は、沖縄761名、熊本629名、鹿児島393名。トップ10は、宮城7名、山口10名、千葉14名、埼玉19名、富山22名、北海道23名、岡山32名、山梨39名、石川41名、鳥取41名。これらの県が「無癩県運動」の先進県と考えられる。愛知は356名のワースト5で、この数値からも愛知を「無癩県運動」の魁とする通説には疑問が残る。なお、九州各県は未収容患者が多く、佐賀の90名が26位、福岡97名、大分114名、長崎172名、宮崎278名である。

特筆すべきは、1935年の調査と比較すると、全国で唯一熊本県だけが157名（男92名、女65名）も増加していることである。他に女性の未収容患者が増加している県が3つあるが、これらの県も全体では増加していない。このことから、熊本県では、1940年の調査までは、きちんとした調査をやってこなかった事実がうかがえ、その反動として戦後の「無らい県運動」が強烈に進行したことを予測させる。

また、注目すべきは、629名の未収容患者のうち、入所を希望する者が46名、希望しない者が537名と、未確定の者46名を除いた92%が療養所への入所を希望していないことである。戦後の一千床増床によって、これらの未収容患者のほとんどが収容されたと考えられるが、それはまさに本人の意志に反した強制であったことがここからも明らかであろう。

太平洋戦争の開戦後も、「無らい県運動」は、1943（昭和18）年ごろまでは継続されたことが確認できる。その音頭をとったのは、長島愛生園園長の光田健輔であった。

光田は、4月1日の『楓の陰』第143号に寄せた「防癩は健民運動の魁である」の中で、次のように指摘している。

今年に於ては健民の重点は専ら結核の上に置かれ、未収容の癩者五千人の収容は政府の予算から削除せられたるは、我等に取って遺憾千万である。併し、政府の予算が通過せぬと云って、無癩運動を終息する訳にはいかぬ。無癩運動は多年の間我が国の国是として継続し来たつたからである。各国立癩療養所は、前進又前進定員超過を敢てし、以て国策に順応し、既に無癩県を標榜するものは十指に余っている。……我等は徹頭徹尾重点を無癩運動に置き、祖国浄化健民運動の魁たらん事を希うものである。各癩療養所の職員は勿論、一万一千の患者も一体となり、救癩総力戦完遂の為に滅私奉公の誠意を捧ぐべきである。

そして、同じく『楓の陰』第145号の「無癩村の予後と楽観」で、光田は、「今日の処、無癩運動は各県府知事の熱心なる指揮によりて、山口・岡山・広島・福岡・愛媛・徳島・奈良・宮城・青森・岩手・福島・埼玉・千葉・山梨・群馬等は殆ど数人に老衰患者を残して浄化せられた。」と15の県名を挙げている。

6月28日、29日の両日にわたって開催された国立癩療養所長会議では、開催に際しての「大臣訓示」で、「所謂無癩県の如きも既に十数県を数ふるにいたりましたことは誠に慶賀に堪えぬ次第であります」と述べ、「無らい県運動」の成果を強調している。

しかし、1944（昭和19）年6月25日に開催された国立癩療養所長会議で「無らい県運動」の促進に関する協議題を提出したのは長島愛生園ただ一つであった。

やがて、各療養所も空襲の被害に遭うようになり、混乱と窮乏の中で、戦前の「無らい県運動」は幕を閉じるのである。